



浮世絵師・葛飾北斎の代表作「富嶽三十六景 凱風快晴」(山梨県立博物館蔵)

世界文化遺産登録10周年！ 富士山の普遍的価値を未来へ

日本の象徴である富士山。広くなだらかな裾野を有する独立峰は、どこから眺めても整った姿を見せてくれます。併せて、季節や時間、気象条件などによってさまざまな表情も持ち、今もなお多くの人々を魅了し続けています。

この美しい富士山が世界文化遺産に登録されてから今年で10年を迎えました。世界に認められた富士山の価値を未来へと引き継ぐため、県は今後も関係者と協力して保全のための取り組みを進めていきます。

「世界に認められた日本一の山

標高3776メートル、日本でも高い山、富士山。しかし、ただ標高が高いだけではありません。雄大な姿と頻繁に繰り返された噴火によって、古くから多くの人が畏敬の念を抱き、やがて「信仰の対象」となっていました。また、溶岩などの噴出物で少しずつ裾野を広げることでつくられた美しい円すい形の姿は、国内外の芸術家の創作意欲をかき立て、さまざまな作品を生み出す「芸術の源泉」として大きな影響を与えてきました。人と自然が、信仰と芸術を通して共生する姿は、富士山が持つ大きな特徴といえます。

ユネスコ世界遺産委員会はこうした文化的な価値を認め、世界遺産の

登録を決定しました。私たち日本人にとって大切な富士山は、世界が守るべきかけがえのない宝となったのです。

順風満帆ではなかった 登録までの道のり

富士山が世界遺産登録に至るまでにはいくつものハードルがありました。

平成4年に「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約(世界遺産条約)」が国会で批准されると、自然保護グループらで構成される団体が、富士山の世界自然遺産登録を目指した運動を開始。山梨県においても、静岡県と共に、富士山を後世に引き継いでいく決意を示した「富士山憲章」を定め、世界遺産登録への動きを加速していきました。

富士山憲章

- 一 富士山の自然を学び、親しみ、豊かな恵みに感謝しよう。
- 一 富士山の美しい自然を大切に守り、豊かな文化を育もう。
- 一 富士山の自然環境への負荷を減らし、人との共生を図ろう。
- 一 富士山の環境保全のために、一人ひとりが積極的に行動しよう。
- 一 富士山の自然、景観、歴史・文化を後世に永く継承しよう。

官民一体となった活動が実を結び、平成15年には国の諮問機関「世界遺産条約特別委員会」が世界自然遺産の候補17地域の中に富士山を選定しました。ところが、国の検討会で選考した結果、最終候補地から落選。ごみの投棄やし尿の垂れ流し、山麓部での開発などが壁となった可能性が指摘されました。

その2年後、今度は文化遺産での登録を目指して再始動。信仰と芸術の価値を前面に訴えることに。課題とされてきた環境問題は、関係団体や住民との清掃活動の実施や、登山者へのごみの持ち帰りの呼び掛け、環境配慮型トイレの計画的な整備などの対策を進めました。麓の開発は、地元関係者と意見交換を重ね、文化

財保護法による区域指定を受けることで厳格な土地利用の規制を導入することとしました。こうした間にも、ユネスコの審査が年々厳しくなり、国内の遺産候補の中で登録延期の決定が下された事例も出てきたことから、県は、登録を成功させるため慎重に慎重を重ねて作業を進めていきました。

そして、再挑戦から8年目の平成25年、度重なる登録目標時期の延期や数々の課題を乗り越え、ついに悲願の世界遺産登録が現実のものとなりました。国内の他の世界遺産に比べ異例のスピード登録であったともいわれています。

より良い保全のために

ユネスコは、世界遺産登録の決定に当たり、富士山保全の取り組みをさらに改善するための指摘・勧告を行いました。

その内容は、建築物の規制強化に関するものほか①資産の全体構想を策定すること②下方斜面の巡礼路を特定すること③上方登山道の収容力を研究し来訪者管理戦略を策定すること④上方登山道の保全手法を定めること⑤来訪者に対する情報提供戦略を策定すること⑥経過観察指標を拡充強化することです。

これを受けて県は、構成資産と緩衝地帯に対する開発制御や景観保全をするための条例を制定したほか、富士山に関する情報発信や保存管理の中心的な役割を担う「富士山世界

遺産センター」の設置、静岡県との協力による上方登山道の収容力の研究と適正な登山者数にすることを目指した対策など、あらゆる取り組みを実施してきました。



吉田口登山道



北口本宮富士浅間神社



御師住宅(旧外川家住宅)



船津胎内樹型



全部で25からなる構成資産の分布図

今もなお続く富士山への不法投棄

「環境面の改善は進んだが…」

世界遺産登録に向けた取り組みを進める中で、富士山の価値への理解や保全の対策も大きく前進しました。民間団体による清掃活動が実施されるようになり、登山者などへごみの持ち帰りを粘り強く呼び掛けていることで、富士山のごみを減らし、新たなごみを増やさない意識が浸透していきました。

また、山小屋などへの環境配慮型トイレの整備が完了し、かつての浸透流式トイレから垂れ流される汚物やトイレトペーパーによってできていた「白い川」と呼ばれる現象は今では見られなくなりました。

このように、世界の宝である富士山の環境は、近年、劇的に改善しました。

と断言したいところですが、実は、いまだにごみの投棄は続いているのです。

右下の写真は、二つとも今年の4月に撮影されたものです。ごみの状態から、最近捨てられたものであることが容易に想像できます。

さらに、山麓の林の中など人目に

つかない場所だけでなく、山頂付近の登山道でもさまざまにごみが捨てられています。食品の袋、手袋、タオルなどのほか、尿が入った袋、ペットボトルや、便とティッシュペーパーがそのまま放置されていることもあります。

「捨てるのも拾うのも同じ人間

不法投棄の未然防止や早期発見、拡大防止のため、監視員による巡回や監視カメラの設置などの対策を講じています。発生してしまったごみは、民間団体やボランティアの協力も得ながら回収が続いています。

しかし、捨てる人がいなければ、本来は拾う必要のないごみ。

ごみを捨てない、捨てさせないとの意識を醸成するため、県はさまざまな機会を通じて不法投棄の現状を伝え、美しい富士山を後世に残すために活動する人々の姿を紹介しています。また、富士山レンジャーによる巡回・監視や学校、企業・団体を対象とした環境教育も実施しています。こうした活動をさらに推進していきます。



東富士五湖道路、富士スバルラインなど、富士山麓の道路付近に投棄されたごみの数々(令和5年4月)

オーバーツーリズムは富士山にも

「大量に押し寄せる車、バス、人

富士山はもともと観光地としての魅力が高く、多くの登山者、観光客が訪れていました。世界遺産登録に向けて注目が高まる中、国内外から訪れる人で以前にも増して賑わいを見せるようになり、登山道や山小屋の混雑、富士スバルラインの渋滞は一層深刻なものとなりました。観光地が持つ受け入れ能力以上に観光客が押し寄せる「オーバーツーリズム」といわれる現象が富士山にも起こっ



登山者や観光客で混雑する五合目駐車場(令和元年)



御来光を見るために山頂へ向かう多くの登山者(平成29年)

ていたのです。
 オーバーツーリズムにより、自動車の排気ガスによる環境負荷や、多くの登山客の踏圧による登山道の劣化など、さまざまな影響が懸念されています。また、混雑によって自分のペースで登山できなかつたり、山小屋で休憩や宿泊ができなかつたりする登山者が生じます。

富士山が持つ資源の価値を下げ、登山する人々の満足度を上げられない今の状況のままでは、いずれ富士山の観光は衰退の一途をたどることになってしまいます。



五合目駐車場に向かう車やバスで渋滞する富士スパライン(平成28年)



「コロナ禍後のこれからが正念場

新型コロナウイルス感染症のまん延以降、社会情勢の変化とともに、観光を取り巻く環境も大きく変わりました。ソーシャルディスタンスを確保するための施設内配置などの感染防止対策は、コロナ禍後もゆとりのある環境で上質な時間を過ごしたい人々の大きなニーズとなってきました。

山小屋も就寝スペースを板やカーテンで仕切り、収容人数を制限するようにになりました。以前のように大勢の人が雑魚寝する窮屈な施設を求める人はいないでしょう。

昨年は新型コロナウイルスの影響を受け、富士吉田口登山道の登山者数はかつての最盛期の水準まで回復しませんでした。感染症法の位置付けが5類となつて初めての登山シーズンを迎える今年、開山期間中の山小屋の宿泊予約がほぼ埋まり、海外からの予約が3割近くを占めるという声も聞かれています。こうした状況の中、富士山の環境や資源を保全するために来訪者数をどのように適正にしていくのか、また、登山者など観光客の満足度をどのように上げるのか、早急な対策が必要となつてきます。

県は平成28年から3年間、どれく

らの登山者が同時に入山できるかを調査・研究し「望ましい富士登山の在り方」やこれを実現するための指標を定めました。

この指標を実現するため、混雑予想などの情報提供を通じて登山者の分散を促したり、構成資産を巡るモデルコースの設定・周知により山麓への周遊を促進したりするなどの対策を実施しています。

富士山への来訪者数を適正化し、富士山の保全と、満足度の高い登山環境を整えることなどにより、持続可能な富士山観光を実現していきます。



下山する人らで渋滞する下江戸屋分岐付近(平成25年)



トイレを待つ登山者で行列する八合目山小屋(平成25年)

見つめ直す、富士山の価値 富士山を通して、それぞれの人生と向き合う

平成25年6月、富士山は世界遺産に登録され、私たちはその普遍的な価値を後世に継承する責任を負いました。これからもずっと、富士山が世界の宝であり続けるために、私たち一人一人が富士山について正しく知り、保全に向けた意識を持つことが大切です。

そんな富士山の世界遺産登録や保全活動に深く関わってきたお二人に、それぞれの立場から富士山の価値や保全の在り方などについて語っていただきました。

「富士山とともに歩んだ人生」

近藤 僕は地元富士吉田市の出身ですが、かつてはまったく富士山に興味がありませんでした。30歳の時に副業として登山ガイドを始めたことから徐々に富士山に魅せられたのです。

ヨーロッパアルプス山脈の麓の街で山岳観光を勉強する機会に恵まれ、

大勢で頂上を目指すだけの富士山登山の在り方に疑問を抱き、35歳で登山ガイドとして起業を決意しました。以来、富士山でエコツーリズム事業を展開し、これまで750回くらい登っています。



山対談

小田全宏

Zenko Oda

事業家・教育者



事業家・教育者

小田 全宏

認定NPO法人 富士山世界遺産国民会議運営委員長
(株)ルネッサンス・ユニバーシティ代表取締役
世界遺産登録運動に尽力

小田 私は富士山の世界遺産登録やその後の保全に関わる活動に20年以上携わってきました。平成4年に日本が世界遺産条約を批准した当初、富士山の「自然遺産登録」を目指す流れがありました。しかし、富士山は固有の生態系などの強みが少なく、さらに環境問題を抱えていたことから、登録基準に合っていないかったのです。そこで私は、富士講に代表される信仰や、浮世絵に描かれてきた富士山の芸術としての価値に着目し「文化遺産登録」を目標に掲げ、平成15年から活動を開始しました。それからさらに10年の歳月をかけて、富士山は「世界文化遺産」に登録されたのです。



平成25年6月22日、カンボジアの首都プノンペンで開かれた第37回世界遺産委員会で富士山の文化遺産登録が決定した。

近藤 世界遺産登録へと導いてくれた小田さんには、とても感謝しています。実は世界遺産登録が決まった時、登山ガイドとしては喜びよりも新たな課題が生じる事への不安の方が大きかったです。しかし、10年経った今は、世界の宝となったことでみんなの意識が富士山に向く良いきっかけになったと感じています。

「励まされ、前を向ける」

小田 私の考える富士山の価値。それは、例えば人生の岐路に立った時や辛い時に富士山を見ると心が落ち着き、よし、やろうと前を向ける。富士山を通して自分の人生と向き合うことができる、これが大きな価値だと思います。



と思います。

「次世代へつないでいくために」

日本では自然界の中に神が宿るといふ考えから宗教が形作られ、山岳信仰も生まれました。富士山を見ると人は手を合わせたくくなります。やはり富士山という自然物に「神聖」なものを見ているのだと思います。近藤さんにとって富士山はどのような存在ですか。

近藤 そうですね、僕はいつも「両親のような存在です」と答えています。いつもも見ていてくれて、そして励ましてくれる懐の深い大きな存在です。麓を歩くだけでも、遠くから眺めるだけでも、富士山のものすごいパワーを感じる事ができます。

また、富士講の時代から、人々は富士山と向き合い、自らの人生と重ね合わせてきました。それが脈々と受け継がれてきた歴史も素晴らしい

小田 一方で、富士山にはさまざまな課題もあります。価値を次世代へ守りつないでいくため、神聖な山である富士山にふさわしい環境の整備が必要だと思います。例えば五合目のごみ問題、発電機の騒音、臭いなども解決しなければなりません。

富士山の自然や文化を守っていくためには、今の状態のまま手を加えないのではなく、しっかりしたコンセプトのもと適切な整備をし、本来の価値を感じられる場所に戻していくことが必要ですね。

近藤 他には、オーバーツーリズムも課題ですね。現在の富士山は、昼前に五合目に集まり、早朝には頂上

で御来光を見るといったツアーが組まれることが多く、特定の場所・時間帯に人が集中しています。僕は曜日や時間などを工夫して「ずらし登山」を実践してきました。混雑時間帯を避けることで、お客様の感動度が高まります。また、前泊・後泊を促すことで、宿泊施設や観光施設を巡ることになり、地域への還元にもなると考えます。

アクセス方法やツアーのつくり方で来訪者の分散を促すなど、本来の富士山の価値を体感してもらうためには、受け入れる側の姿勢も大切だと思います。

「次の10年に向けて」

小田 これからの富士山のあるべき姿として、私は富士山を平和のシン

ボルにしたいと思っています。宗教も、西洋・東洋も関係なく、みんなが世界平和の祈りを捧げていくような場所に成り得ると思います。「一人一人が自分と出会い、みんなが平和を願う」。そこに富士山の神髄があると私は考えます。

近藤 時代とともに富士山との関わり方も変わりますから、価値を受け継いでいくためには、それに応じた人材を育てていくことが大切です。そのためにはたくさんの子どもに富士山のリアルな体験をしてほしい。富士山は日々投げかけてくるものが違うので、それを若者にキャッチしてもらいたいです。そして住んでいる人も、訪れた人もみんなが幸せを感じられるような「感幸(かんこう)」を目指していきたいです。



富士山エコツアーガイド

近藤 光一 さん

富士山登山学校ごうりき代表((株)合力代表取締役)

環境省自然公園指導員

富士山の麓から山頂までのエリアにて、少人数エコツアーのガイド事業に従事。

ごうりきは環境省「エコツーリズム大賞」を受賞



提供: 合力

合力では、ずらし登山や少人数の構成により、富士山の魅力を感じられる感動度の高いツアーを提供している。

世界に類を見ない先進的な富士五湖地域へ

富士山の世界遺産登録の際、ユネスコから環境と観光の両立など解決すべき多くの課題が出され、県は地域と協力しながら一つ一つの課題に取り組んできました。しかし、オーバーツーリズムや環境負荷など、まだまだ多くの課題が残されています。この問題を根本的に解決し、上質で先進的な地域をつくるため、富士五湖地域では、持続可能な観光・地域の在り方を県内外の人や企業・組織が共に考え実行していく新たな取り組みが始まっています。

「自然首都圏に向けて

富士山の麓に、国内最高の観光リゾート地と最先端の首都圏機能を融合させた、世界に類を見ない先進的
地域「自然首都圏」を創出しようと、
県は昨年、富士五湖自然首都圏フォーラムを立ち上げました。フォーラムでは、芸術の街（アートシティ）の推進や環境に優しい次世代交通（グリーンモビリティ）の普及、学問・芸術・文化・スポーツの中心地（アカデミア）の促進などをテーマに5つのワーキンググループ（WG）を立ち上げ、地域住民や参画企業・組織と共に、議論を重ねています。このうち、アートシティの推進に向けた具体的な取り組みが始まっています。

「動き出したアートシティへの道

江戸時代、歌川広重や葛飾北斎をはじめ多くの画家に描かれてきた富士山。これらの絵画は海を渡り、ゴッホなど、当時のヨーロッパの画家たちに強いインパクトを与えました。それから100年以上経過した現在、富士山の麓に広がる富士五湖地域は最高の芸術や音楽を楽しめるアートシティに進化しようとしています。

4月、日本の芸術界の中心的な役割を担う公益社団法人日展が、このフォーラムに参画しました。日展は富士五湖地域の美術館やホテルと連携したアート作品の展示会等、多様な発表の場を設けることで、若手アーティストの育成などに取り組んでいきます。日展の参画によって、富士山の麓には日本中からアーティストが集まり、素晴らしい作品が次々と世界に発信されていくでしょう。

そして、住民は日常的に優れた芸術に触れ、日々の生活に彩りが加わることでしょ。

富士山が持つ芸術の源泉としての価値を後世に受け継ぎ、いつまでも芸術家に愛される地域となることを目指し、取り組んでいきます。

「イコモスが鳴らす警鐘

富士五湖自然首都圏フォーラムでは、環境に配慮した次世代交通についても検討を始めています。山梨県側の富士山五合目は、電気も水も引かれておらず、観光客の増加により自動車や自家発電機の排気ガスなどによる環境負荷がますます大きくなっています。また、信仰の山にふさわしい景観づくりも進んでいません。このままでは多くの方が期待するような富士山とは懸け離れる一方です。世界遺産登録の際にユネスコの諮問機関である国際記念物遺跡会議（イコモス）からも、来訪者管理、環境保全、景観保全について改善を要請されており、地元自治体の責任として解決していかなければなりません。

こうした中、課題を一挙に解決に導く方法の一つとして検討を進めているのが「富士山登山鉄道構想」です。今ある道路の上にレールを敷き、次世代型の路面電車（LRT）を走



世界に類を見ない、上質で先進的な地域を目指す富士五湖地域

らせ、来訪者を五合目まで運びます。電気で走るため、排気ガスは出ません。LRT導入と同時にルートに沿って電気や上下水道などのインフラを整備すれば、五合目の自家発電による排気ガスの問題も解決でき、環境負荷が軽減されます。道路の渋滞はなくなり、まるでヨーロッパにある山岳鉄道のように、美しい景観も保てることでしょう。また、登山鉄道は来訪者数を適正に保つとともに、年間を通して運行することで、富士山の四季の魅力を堪能できることから、来訪者の満足度向上も期待できます。

「構想をより具体的に」

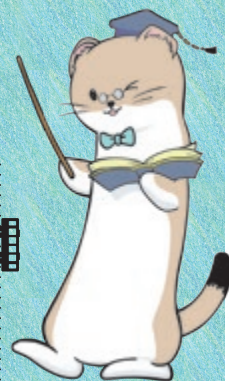
かつて何度も提唱されてきた富士山登山鉄道ですが、どれも具体的に欠け、実現には至りませんでした。

そこで県では、まず国内の有識者による検討会を開催し、LRT導入が富士山の環境保全に有効であり、安全性や快適性などの点で最も優れた交通手段であるとの結論に至りました。今後は、関係する自治体や地域住民の皆さん、富士山で働く皆さんとしっかりと議論を重ねていきます。

持続可能な富士山・富士五湖地域を実現するためにどうすべきなのか、皆さんも一緒に考えていきましょう。

＼もっと知りたい!／

富士山登山鉄道



富士山で暮らす
オコジョ博士

なぜ登山鉄道を検討しているの?

今の富士山は観光客が多すぎて世界遺産にふさわしくなっていないと言われているんだ。それに今は五合目に電気や上下水道がないので、自家発電機で重油を燃やして発電したり麓から自動車で水を運んだりしなければならないんだ。多すぎる観光客を減らして、このような環境負荷を少しでも軽くするためのアイデアとして登山鉄道を検討しているんだよ。

LRTってなに?

LRTは新しいタイプの路面電車なんだ。富士山みたいな急な坂道も上れるし、当然排気ガスも出ないから、自然に優しい交通手段だね。今検討しているLRTは電線も必要ないタイプなので、富士山の景色も悪くならないよ。

なぜバスではなくLRTなの?

富士山五合目に電気バス・水素バスを導入するにはたくさんの車両やドライバーが必要で、運行上の課題があるんだよ。それに上質な空間と特別な体験を提供できるLRTの方が観光資源としての魅力があるんだ。

神聖な富士山を傷付けるのでは?

今の富士山は多くの観光客や排気ガスなどで本来の神聖さが損なわれている状態なんだ。登山鉄道で観光客数や排気ガスの問題を解決して、信仰の山にふさわしい神聖さを取り戻そうとしているんだよ。それに、今ある道路の上に軌道を引くし、新しい電線も作らないから、自然破壊や環境破壊にはならないよ。自然を守るために自動車から鉄道に切り替えるのは、世界中で常識になっているんだ。

観光客や登山者が増えるのでは?

それは逆だよ。今は来訪者の多くが夏場に集中して押し寄せているのを、年間に分散させながら適正な数にしていく計画なんだ。バスやクルマと違って、鉄道なら運行回数や運行時間をうまく決めれば、お客さんの数をコントロールできるからね。

訪れる人にはどんないいことがあるの?

「信仰の対象」「芸術の源泉」としての富士山本来の価値を感じることができるし、乗車体験そのものが思い出に残り、満足度も向上するよ!

五合目はどうなるの?

今はコンクリートの人工物が目立つ状態だから、LRTの駅を建てるときに五合目全体が自然に溶け込んだ外観になる計画だよ。防災拠点としてシェルター機能も持たせて災害に備えるんだ。



富士山登山鉄道の終着駅となる新しい富士山五合目のイメージ図